

11月22日（土） 鶴見緑地球技場

第1試合 姫獨大 vs 大院大

初の1部昇格となった前期に4勝をあげて6位で折り返した姫獨大も、後期は未勝利で5連敗と最下位に沈み、この試合に敗れると自動降格が決まる。一方の大院大も入替戦行きとなる10位と苦しい状況で、ともに是が非でも勝ち点3を奪いたい試合。

緊張感で選手たちは「ガチガチ」「つなげずに蹴るばかり」とは大院大・藤原義三監督。激しい当たりが繰り返されFKが多く流れが途切れる試合となった。それでもFW⑨岡村和哉が基点となってペースを握った大院大だったが、決定的な場面は作れず時間は経過し、43分にはポストを叩く惜しいシュートもあったが、スコアは動かず勝負は後半へ。

ともに負けたくないという意識が上回りなかなかリスクを冒すことなく、得点の匂いも感じられない。しかし78分、自陣から懸命にドリブルで上がった大院大DF⑤畑中俊逸が右サイドからクロスを入れる。GKが飛び出すが届くことができず、岡村が落ち着いて頭で合わせてゴールを割り、貴重な得点を大院大にもたらした。リードされた姫獨大だが、その後の反撃にも迫力は感じられずそのままタイムアップ。姫獨大は2部降格が決まり、勝った大院大は今節の結果、得失点差で8位に浮上した。

（文：サッカーライター 貞永 晃二）

姫獨大 0 $\begin{Bmatrix} 0-0 \\ 0-1 \end{Bmatrix}$ 1 大院大

得点(アシスト)者
78分 9 岡村(5 畑中)

第2試合 関学大 vs 桃山大

関学大 2 $\begin{Bmatrix} 0-0 \\ 2-0 \end{Bmatrix}$ 0 桃山大

得点(アシスト)者
50分 9 金尾(17 原田)
72分 31 津田(30 桑野・11 桑原)

前節阪南大に敗れインカレ出場権を失った関学大と、まだ残留を確定できない7位桃山大。桃山大のモチベーションが高いかと思われたが、内容は関学大の一方向的なものになった。

関学大の攻撃はMF 28 阿部浩之のファーストシュートで始まりFW⑪桑原透記が続く。長短のパスに人も連動する関学大は、1年生2トップに期待する桃山大の反撃の芽をつぶし、得点も時間の問題に思われた。しかし終盤、阿部のシュートが1本はポストを叩き、1本はGK①北井太陽の好セーブに阻まれ先制できず前半を終える。

後半も流れは変わらず、桃山大は守備一辺倒。そして後半5分、右からのクロスでFW⑨金尾和泰がダイレクトで決めて均衡を破った。その後も桑原、MF⑩小関佑典、再び桑原とシュートが続く関学大。そして欲しかった2点目は27分、MF 30 桑野裕士のシュートがポストを叩いたりバウンドをDF 31 津田真吾が押し込んで決めた。これで試合は決着。シュート数、21対3とまさにワンサイドゲームだった。

敗れた桃山大だが下位チームの結果で1部残留が決まった。最終節は立命大が残留をかけて挑んでくる。「大学最後の試合(桃山大・北江進吾)」を勝って有終の美を飾りたい。

（文：サッカーライター 貞永 晃二）

11月24日（月・祝） 西京極総合運動公園陸上競技場

第1試合 関西大 vs 同大

「インカレで日本一になるための道程だが、キッチリと同大を叩く。」(島岡健太コーチ)というスタンスで臨む関西大と、「試験的な部分もあるメンバー。」(望月慎之監督)という同大。

実際、ベストメンバーに近い関西大に対して、同大は登録18人に4回生は1人も居ない。最近の調子も考慮すると大差で関西大が勝つ事も十分に考えられた。

しかし、試合はどちらかに流れが偏る事のない拮抗した戦いになった。互いに労を惜しまない、しっかりと守りをベースにしていたため、決定機すら訪れない。それでも、痺れを切らさず、粘り強く攻めた関西大に先制点。後半17分、左サイドからのクロスが続き、同大DFのマークがルーズになった隙にFW⑩金園英学がボレーを決めた。34分にも、MF 24 藤澤典隆が泥臭く蹴り込み関西大に追加点。

手堅く勝ち点3を収めた関西大だが、若い同大に戸惑った様子は隠せず。逆に、同大は、新たなオプションが生まれた事への一定の満足感を得ていた。

（文：サッカーライター ハヤシ ヒロヒサ）

関西大 2 $\begin{Bmatrix} 0-0 \\ 2-0 \end{Bmatrix}$ 0 同大

得点(アシスト)者
62分 19 金園(14 中村)
79分 24 藤澤(21 大屋)

第2試合 阪南大 vs びわこ大

阪南大 0 $\begin{Bmatrix} 0-0 \\ 0-0 \end{Bmatrix}$ 0 びわこ大

勝ち点差は3だが、得失点差があまりに大きいため、この試合が引き分けに終わると阪南大の優勝が実質決まる。びわこ大の松田保監督は、「大量得点で勝つという展開は考えていない。まずは勝って相手にプレッシャーを。」と最終節へ繋げる勝利を狙っていた。阪南大としても、スッキリと優勝を決めたいという思いもあり、「勝ちしか考えていない。」(主将・⑬西田剛)という姿勢。

試合は、首位決戦だけあって、質の高い攻守を互いに繰り広げた。シュートシーンで何度か会場が沸くが、実際には決定機は共に皆無に近い。崩し切るには至らず、セットプレーや流れの中から強引に攻めにかかる場面も見られたが、互いのDF陣の集中力と対人守備の強さが目立った。阪南大はFW⑪木原正和を投入し攻撃を活性化させ、びわこ大も今季得点を量産しているMF⑨瀬古朋広を途中出場させたが、ゴールという結果には結び付かず。

スコアレスドローを知らせる笛が鳴った時、阪南大の実質的な優勝が決まったが、会心の笑みは見られなかった。

（文：サッカーライター ハヤシ ヒロヒサ）

11月24日（月・祝） 大阪長居第2陸上競技場

第1試合 近畿大 vs 大教大

第10節のボトム大一番。もう後がない近畿大は前節1-7と大敗しただけに、勝利しか生き残る術がない。対する大教大は残留のサバイバルレースから一歩リードしたように思えたが、前節、大院大戦で引き分けたことが痛かった。

近畿大は序盤、三好、森原の大教大2トップ対策として、DF足立、松原をセンターバックに、山口を左サイドバックに配置。これが功を奏し、大教大の得点減の動きを封じ込めた。先にチャンスが到来したのは近畿大。後半2分、MF金田英之の縦パスに反応し、DFラインの裏へ飛び出したFW⑪平石竜真が決め、渴望していたゴールを挙げる。「先制点を挙げると、のるチーム」というように、近畿大はここからリズムを掴む。平原、枝本を基点としたパスワークに大教大の中盤が引きつけられ、完全にトップとの距離ができてしまった。同点に追いつきたい大教大はFW⑩田中俊一を投入し、3トップに変更。さらに交代で入ったMF⑪土屋貴裕が前線へ顔を出し、終盤は惜しい場面もあったものの後半はシュート0。死力の1点を守りきった近畿大が、残留への可能性を手に入れた。

（文：フリーライター 久住 真穂）

近畿大

$$\begin{Bmatrix} 0-0 \\ 1-0 \end{Bmatrix}$$

大教大

得点(アシスト)者

47分 11 平石(2 金田)

第2試合 立命大 vs 京産大

立命大 0 $\begin{Bmatrix} 0-0 \\ 0-0 \end{Bmatrix}$ 0 京産大

後期停滞している立命大は前節、7得点と快勝し、残留へ前進するためにも2連勝といきたいところ。対する京産大は既に来期を見据えたチーム作りへ方針転換。目標とするものは違っても、目指すは勝利のみ。

立命大は前節結果を残した1回生2トップFW 36 伊藤了、FW 38 藤田浩平を先発起用。前半33分、MF 27 内藤洋平のFKがこぼれたところをMF 39 篠原翔が強烈なミドルシュート。しかし、惜しくもポスト直撃。前半最大のチャンスを逃す。後半は、前がかりにきた京産大にがっちりマークされ、出し所がない状況だった。つなぐサッカーの生命線といえる中盤での落ち着きところが見当たらず、残留争いの渦中にいるが最終節に課題を残す試合となってしまった。

一方の京産大は、来期に向けた「高めからのカウンター」と新たな戦術を掲げた。後半は特にMF⑦馬場悠企、MF⑧櫛田一斗などが中盤からボールを奪うと、サイドへ流して速攻で仕掛けていく攻撃が目立った。「多少戸惑いはあった」(馬場主将)「もっと大きな局面がほしかった」(古井裕之監督)と話すように得点こそなかったものの、全員が運動した攻撃に持ち込めたことは、京産大にとって収穫ある試合となった。

（文：フリーライター 久住 真穂）

～第10節の風景～

交代出場でゴールも狙うも遠かった…最終節に期待！ ◆木原 正和（阪南大・3年）◆



11月24日（祝）西京極〈阪南大・びわこ大〉

■ 撮影：UNN関西学生報道連盟 ■